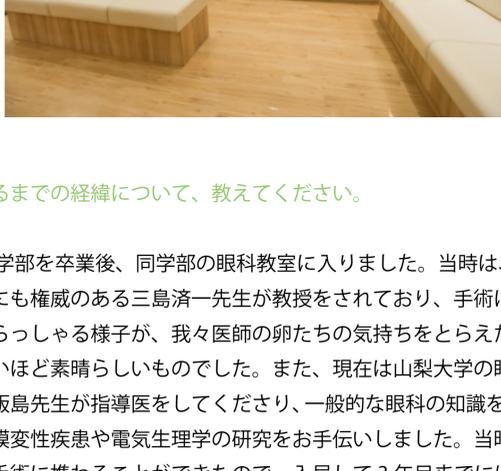


タワーマンションが建ち並び、今後も開発が進んでいくであろう武蔵小杉駅。同地を拠点とした「医療法人社団博陽会 ひらと眼科」は、2014年11月に開院した。院長の平戸孝明氏は、東京大学医学部付属病院を皮切りに、5カ所の大きな病院で研鑽をつんできた、ベテランの眼科医。元々物理学に明るく、網膜の電気生理学や変性疾患などについても詳しいという。手術も得意で、特に白内障、網膜硝子体疾患や緑内障などの手術に多く携わってきた。その確かな技術と切れ味よくわかりやすい語り口を慕って、以前病院で診ていた患者たちが多く通いつけているという。溢れんばかりの知識をわかりやすく相手に伝えようとする平戸院長に、クリニックの特色や今後の展望についてなど、詳しく話を伺った。

(取材日 2015年9月9日)

数々の病院で難しい手術に携わってきた、眼科のエキスパート



—開院されるまでの経緯について、教えてください。

東京大学医学部を卒業後、同学部の眼科教室に入りました。当時は、角膜の研究で世界的にも権威のある三島済一先生が教授をされており、手術に自信をもって臨んでいらっしゃる様子が、我々医師の卵たちの気持ちをとらえたと言っても過言ではないほど素晴らしいものでした。また、現在は山梨大学の眼科で教授をされている飯島先生が指導員をしてくださり、一般的な眼科の知識を学びながら、難治性の網膜変性疾患や電気生理学の研究をお手伝いしました。当時はわりと早い段階から手術に携わることができたので、入局して3年目までには、白内障や緑内障、網膜剥離など、一通りすべての手術ができるようになっていましたね。手術法自体が革命的に進歩しており、白内障の超音波手術が始まったのもちょうどこの頃のことでした。その後、河北総合病院へ赴任し、さらに東京通信病院に1年2ヵ月ほど赴任したのですが、ここで神経眼科の大家である小澤哲磨先生と出会い、斜視や弱視、網膜剥離手術などを任せられるようになりました。また、小澤先生が弟子として認めた人材のみ参加できるOB会にもお声かけいただき、おかげさまで横の人脈も広がりましたね。31歳になって現在のJCHO東京高輪病院に赴任し眼科部長を9年5ヶ月務めました。その後、関東労災病院へ眼科部長として赴任し、多くの患者さんと向き合っていく中で、だんだん開業に意識が向くようになっていきました。

—病院からの信頼も厚かったと思いますが、開業を決められたのはどうしてでしょうか。

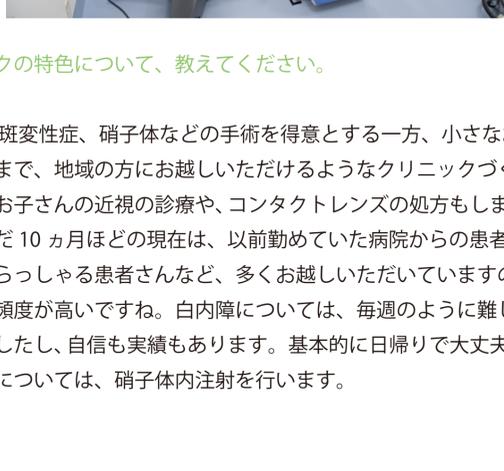
病院は大きな組織ですから、全体のルールに従ってやっていかなければなりません。その都度タイムアウトやナースへの引き継ぎを何度もして、やっと手術室に入ることになるため、短時間でどんどん手術をしていく眼科にとっては、時間ばかりかかって効率が良くないと思っていました。また、日帰りの手術を希望する患者さんが多いのに対し、スタッフが手いっぱいできないというジレンマもありました。それならばいっそ、眼科クリニックを開院した方がこれらの課題を解決できるのではないかと、一念発起したわけです。

—この地で開院されたのは、どのような理由からですか？

そうですね。嬉しいことに私を頼りにしてくださっている患者さんたちも大勢いらっしゃいましたから、その方たちに引き続き来ていただける場所であること、なおかつ手術をするスペースが確保できることを必須条件に探していました。武蔵小杉は再開発の途上にあり、タワーマンションもどんどん建てられていて、この先人口増加が望める地区ですし、住みたい街のアンケート上位にも属しています。魅力的な条件がそろっていたのですが、開院に適した物件がなかなか見つからなかったんですよ。周りの方のお力添えで、奇跡的に条件のあう当地に巡り合うことができ、本当にありがたいと思っています。



個人クリニックとしては難しい白内障などの手術もできる、地域のホームドクターをめざす



—クリニックの特色について、教えてください。

白内障や黄斑変性症、硝子体などの手術を得意とする一方、小さなお子さんから高齢者まで、地域の方にお越しいただけるようなクリニックづくりをめざしています。お子さんの近視の診療や、コンタクトレンズの処方もします。しかし、開院してまだ10ヵ月ほどの現在は、以前勤めていた病院からの患者さんや、クチコミでいらっしゃる患者さんなど、多くお越しいただいていますので白内障の手術をする頻度が高いですね。白内障については、毎週のように難しい手術に携わってきましたし、自信も実績もあります。基本的に日帰りで大丈夫です。また、黄斑変性症については、硝子体内注射を行います。

—患者さんの症状など、大きな病院との違いはありますか？

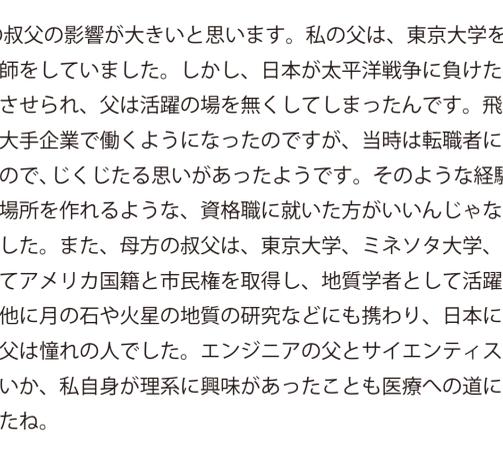
病院では、難しい治療を必要とする患者さんが他院からの紹介状を持っていらっしゃるケースがほとんどでしたが、当クリニックにクチコミでいらっしゃる患者さんの中には初診の方も多く、「何が原因なのか」ということを解き明かすことにやりがいを感じますね。また、紹介状をお持ちになる患者さんは、変性疾患などがあつてずっと経過を診ていかなくてはいけないような方が多かったです。1回診ただけで大丈夫な疾患の方もいらっしゃる、こちらの行為がすぐに反映されますので、短いスパンで達成感が得られることにもやりがいがあります。

—診療に際して心がけていらっしゃることは、どのようなことでしょうか。

患者さんに向けて、わかりやすくご説明するよう心がけています。撮影した画像を保存して電子カルテに回すなどのシステムは整っていますので、データも全部ディスプレイに映し出せます。難しい言葉を使いながら長々と話すより、「百聞は一見に如かず」で、画像をお見せしながらご説明すると、ご年配の方も納得してくださいますね。中には知的興味の高く高い患者さんもいらっしゃる、そういう方にはもう少し深いところまでご説明するようにしています。私は医大生の頃に網膜の電気生理についても学んできましたから、完治することが難しい網膜の変性疾患などについても詳しい方だと思います。昨今話題のIPS細胞を使つての再生医療についてお知りになりたいという患者さんもいらっしゃる、現在は難治性とされる病気について、将来の見込みはどうかなどをわかりやすくお話しすると、喜ばれますね。もちろん、他にお待たせしている患者さんがいなければ、ということになりますが。



身内や友人たちとの交流から育まれた“今”を大切に、医師としてできることを全うしたい



—医師を志すようになったきっかけについて、教えてください。

父と、母方の叔父の影響が大きいと思います。私の父は、東京大学を卒業後、飛行機設計技師をしていました。しかし、日本が太平洋戦争に負けた後7年間航空産業は停止させられ、父は活躍の場を無くしてしまったんです。飛行機産業が復興してから大手企業で働くようになったのですが、当時は転職者にとって不遇な時代でしたので、じくじたる思いがあったようです。そのような経験から、しっかりと居場所を作れるような、資格職に就いた方がいいんじゃないかとアドバイスされました。また、母方の叔父は、東京大学、ミネソタ大学、ハーバード大学を卒業してアメリカ国籍と市民権を取得し、地質学者として活躍していました。地震学の他に月の石や火星の地質の研究などにも携わり、日本に里帰りするたびに会う叔父は憧れの人でした。エンジニアの父とサイエンティストの叔父がいる家系のせいか、私自身が理系に興味があったことも医療への道に進む大きなきっかけでしたね。

—お忙しい中、休日はどうのように過ごされていますか？

犬を飼っていて、毎日一緒に散歩に行っています。ウェルシュコーギーで、今飼っている子が3匹目になりますね。コーギーはとても手間のかかる犬種で、頭はいいのですがその分悪さはするし噛みつくしで、常に生傷が絶えません。しかし、噛まれ慣れているせいか、感染症に対する免疫ができて腫れないんです。こうして大変な思いをさせられてきたせいか、他の飼いやすい犬種では物足りないのかもしれない(笑)。他に、映画や芝居を観に行ったり、SF小説が好きでよく読んだりしていますね。実は、大学時代の6年間は演劇もやっていたんですよ。演劇の道に進もうと思ったこともありました。クリエイティブな仕事の方はフラストレーションが強く、向いていないと悟り断念しました。川崎市眼科医会の会報に年1回演劇関係のエッセイを書く依頼がくるので、新しい演劇を観に行くようになり、偶然、昔の知り合いと再会を果たしました。新しい演劇を観に行くことによって、古い付き合いを復活させたとも言えましょうか(笑)。

—最後に、今後のクリニックの展望について教えてください。

川崎市内の個人クリニックでは、ニーズの高い緑内障の手術をするところはないため、余裕ができたなら緑内障の日帰り手術を必要とする患者さんも受け入れたいと思っています。やはり医師として、重症の患者さんも治していきたいですから。また、普通のクリニックではできないような、難しい病気についても対応していきたいですね。強度近視のためのICL(有水晶体眼内レンズ)という強度近視矯正のための眼内レンズを使用した治療など、今後も新しい分野にもチャレンジしていきたいと思っています。

